

芸術の気晴らし（雑誌『Effetto Arte』のための記事）

詩人や作家は、おそらく静けさのなかで仕事をする。正直に言えば私もそうだ。あなたがたのために、あるいは自分のために書くとき、私はふつう視覚的にも聴覚的にも気を散らすものを置かない。だが、いったいどんな奇妙な理由から、視覚芸術家は自分の着想をカンヴァスへ、あるいは素材へ移そうとするその行為のさなかに、気を散らしたいという生まれつきの必要を感じるのだろうか。

その理由を突き止めるには科学的な調査が必要だろう。よい結果を見たいという不安が、早く終わってしまうことへの恐れに変わるのかもしれない。あるいは、アニメを見ながら宿題をするという子どもじみた習慣に取り憑かれているのかもしれない。あるいは単純に、働くと疲れるのだ。

いずれにせよ、アトリエでは、芸術家が気を散らすのを好むさまざまなやり方を観察できる。もっとも古典的なものから、もっとも大胆で創意に富んだものまで。

コーヒーは確かに、どのアトリエにとっても第一の、そして普遍的な気晴らしである。肝心なのはモカポットを使うことで、いまどきのカプセル式の機械ではない。湯が釜から粉を通して小さなカップに落ちきるまでのあいだが、短い休息と、助手や画商や来客との、あるいは誰もいなければ架空の人物とのおしゃべりを許してくれる。しかも私たちは、うまいコーヒーのあとには仕事をもっとはかどるはずだと信じつつけていられる。

実際には、その日八杯目ともなれば、慣れきった身体は何の恩恵も受けない。おまけに多くの者は、うまいコーヒーのすぐあとに際限なく葉巻を吸うのを好むから、アトリエはかなり煙たく、酸素はほとんど残らず、それが穏やかで広範な眠気を助長する。

では、コーヒーは何の役にも立たないではないか、とふと思う。

電話はコーヒーと同様、絶え間ない、ありがたい気晴らしの源だ。メッセージのたび、フェイスブックの共有のたび、通信会社の通知のたび、予定と通知のたびに、ちゅんちゅん鳴く。友人、親戚、同僚、そして未知の番号の到来を金切り声で告げる。彼らは信じがたい申し出と物語で私たちをたぶらかそうとする。自らの創造的着想の執行者という退屈な境遇を憐れんだ天使に、どうやら靈感を得ているらしい。

古典的な気散らしの最後の要因は、助手や協力者の質問である。ほとんどつねに的を射た質問であり、それは、彼らが一刻も早くあなたを煩わせられるように、やるべき仕事をあなたがわざとよく説明しなかったせいだ。

カンヴァスに塗る石膏地の色味や、使うべきモノクロームの色味の迷いを断つには、少し手を止めて、まずうまいコーヒーを淹れることに勝るものはない。

こうして循環がまた始まる。

だが多くの者にはこれでも足りない。そこでイーゼルの脇に、美術書を積み上げた自走式の高床建築が生まれる。その頂には六十インチのテレビが載り、街区じゅうのグラスをひっくり返すか破裂させるほどのアンプ付きサブウーファーを備えたサラウンド装置が据えられ、音楽を、オーディオブックを、講演を聴き、サッカーの試合を見、回想を口述し、愛と

仕事の関係を編むための、多かれ少なかれ手の込んだ装置が並ぶ。

すべては少しばかり気を紛らし、「いま働いている」というあの恐ろしい感覚を持たずにすむために。

気晴らしへの欲求は、遅かれ早かれあらゆる芸術家と創作者を襲う病だ。ならば諦めて、好みの気晴らしを選ぶがいい。私が勧めるのは古典の朗読と生の音楽である。背後で誰かが読み、奏で、話しているという事実は、仕事を進める助けにもなる。せめて自尊心のためにでも。

この症候群に払う残酷な代償は、当然ながら、土曜と日曜をアトリエでひとり過ごし、一週間だらだらと引きずってきた仕事を仕上げることだ。だがその代償は、結局のところ喜んで払われる。自分がこの仕事に本当に打ち込んでいるのだと感じさせてくれるからだ。

Luca Motolese ・ Torino 2017

motolese.com — 原文はイタリア語